

## 論文要旨

人が幸福な生活を送るためには、一体何が必要であろうか。本研究では共同体への帰属が人の幸福に影響を及ぼすものと考え、個人の生活に対する主観的な幸福感 (Subjective Well-Being) を用いて、家族、地域、組織、国家への帰属意識が人の幸福感に及ぼす影響について検証した。また帰属意識と主観的幸福感とを媒介する心理要素や帰属意識の背後にある心理について探索的に検証し、実際の共同体施策を検討・実施する際に有益となる知見を得ることを目的とした。

本研究では大学生を対象とした紙面によるアンケート調査、ならびに幅広いサンプルを対象とした web 調査で帰属意識や主観的幸福感といった心理尺度を測定した。調査で得られたデータを整理し、分析を行った結果、これまで幸福との関連があまり報告されてこなかった、国家への帰属意識の高さが主観的幸福感に影響を及ぼしている可能性が示唆された。また、各共同体への帰属意識と主観的幸福感との間には当該協体内での安心感や役割意識、協同作業への肯定的な態度といった中間心理要素が存在し、帰属意識と主観的幸福感とを媒介している可能性が示唆された。さらに、共同体への帰属意識の規定要因に関する検証では、ニーチェの思想から導かれる「運命愛」、ハイデガーの理論から演繹される「本来的時間性」の二つの概念が、帰属意識に寄与する可能性が示された。

以上の結果より、国家政策の目指す「国民の幸福の増進」のためには各種共同体への人々の帰属を深めるような諸施策を実施することの有効性・妥当性が示されたものと考えられる。また実際の共同体施策を講じる際に必要な、帰属意識が主観的幸福感に影響する具体的なメカニズムや、人々の帰属意識を喚起するための心理的方策についても一定の知見を得られたものと推察される。